

琵琶湖周航の歌 100 周年記念「なぞり周航」記

2017 年 6 月、琵琶湖周航の歌が誕生して 100 周年を迎えた。京大ボート部 OB を中心として記念のなぞり周航が企画され、嘉田元知事らが事業の統括をし、6 月 24 日、瀬田川にある京大艇庫を 7 人乗りの



フィックス艇 3 艘が出発。西回り航路で周航の歌歌碑のある三保が崎、近江舞子、近江今津、海津大崎、竹生島、長浜、彦根、長命寺を経由して 3 泊 4 日で 27 日に瀬田川艇庫へ戻る計画。経由地では住民を挙げての歓迎会や催しが待ち受けていた。京大ボート部員が受け継いだ歌は、今や滋賀県民はもとより日本人びとの心の歌として日常生活に浸透していると実感した。(写真右上はなぞり周航HPの地図に初雁の航路を追記)



私たち琵琶湖トラストの仲間 4 人はクルーザーで伴走して参加、なぞり周航を楽しむことにした。

メンバーは岡田英昭、高木 順、中川隆一、香川晃一。

(写真左)

6 月 25 日午前 7 時 15 分、柳ヶ崎ヨットハーバーを出港。

琵琶湖大橋を越えて暫くすると近江舞子の砂浜が見えてくる。近江舞子は、歌詞に「雄松が里の乙女子は 赤い椿の森陰に はかなき恋に泣くとかや」と謳われた場所である。作詞した小口太郎が想いを寄せた乙女子は故郷長野県諏訪湖畔に実在したという。琵琶湖周航の歌記念館には、元「乙女子」や「赤い椿」の樹があった場所の写真が残っている。この事を知って俄然、歌詞の内容が現実味を帯びて迫ってくる。雄松館は小口太郎らが宿泊した旅館で、今も営業しており、今回のなぞり周航でも赤椿寿司(写真右)などで関



係者をもてなしたという。

さらに北へ進むと白髭神社(写真左)が見えてくる。湖上から見る赤い鳥居は水中から立ち上がり、琵琶湖の水の恵みに感謝しているかのような。境内には紫式部の歌碑がある。平安時代に、

父である藤原為時の赴任地越前国へ同行して、現在の高島市三尾を通った際に、都への惜別の想いを詠んだ歌とされる。

「三尾の海に網引く民のてまもなく立居につけて都恋しも」

歴史の重みを感じる航海だ。

北上を続け安曇川河口沖を過ぎると今津の港が見えてきた。係留して木原会長らの乗る旗艦に横付けして上陸した。(写真右上)



荷物を、ダイセン工業岩崎会長のご好意でお借りした保養所に置いて、今津港近くに戻ると市民会館では「100周年記念音楽コンクール」が行われていた。歓迎一色である。

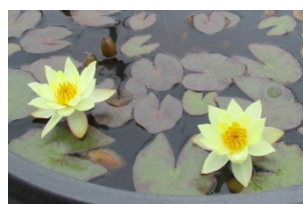
港近くのひょうたん亭で昼めしに「周航蕎麦」(写真下左)を頂くことにする。氷魚の天ぷら、鴨肉、比叡湯



葉などびわ湖に縁の品々が目を引く。黒いシタケは竹生島か。添えられた鯖寿司は、

その昔、越前の海でとれた鯖を、鯖街道を通して近江や京の都へ運んだ歴史を偲ばせる。

今津町の道路を歩くと、歩道脇の歌碑からびわ湖周航の歌が流れ、メロディーの原曲のタイトルとなった「羊草」の鉢が沢山並べられている。(写真右)町のこの歌に対する思い入れの強さが伝わってくる。びわ湖周航の歌資料館に入ってみると、この歌の誕生に纏わる不思議な事実の発見で歌の魅力に引き込まれる。作詞者小口太郎、作曲者吉田千秋は共に20歳で作詞作曲したが、一度も会ったことはなかった。小口太郎が今津の宿で披露した詞にクルーの一人が当時流行っていた羊草のメロディーで歌ってみたところ、七五調の詞に上手く合ったという。2人は夫々27歳、



25歳で夭逝した為に詳しい資料は知られていなかったが、近年になって研究家飯田忠義氏の調査により小口家実家(長野県岡谷市諏訪湖畔)に太郎が今津から出した葉書が見つかり、投宿した大正6年6月28日の日付が分かった。また吉田千秋については歌の誕生から65年後の昭和57年になって今津町の有志が故郷の新潟日報紙に「吉田ちあきを探して」と記事を掲載したのをきっかけに実家の末裔と連絡がとれたのだそうだ。歌碑には今津の人々の思いが詰まっている。(写真左上)

今津港の近くには丁子屋という名の川魚料理店が営業している。現在、店を切り盛りしているのは娘さんであるが、以前は娘の親爺(故人)さんが炭火でモロコの素焼きやウナギ

のかば焼きを焼きながら「琵琶湖周航の歌は丁子屋の 2 階で作られた」と語っていたように記憶している。記念館の人の話では歌詞がつけられた旅館と思われるのは 3 軒ほどあり特定されていないとの説明。いずれにしても小口太郎は故郷の乙女子を想いながら今津の宿で作詞したということか。自筆の葉書が展示されており往時の事を偲ぶ。

「赤い泊火懐かしみ」の泊火は今津港の棧橋にあった。

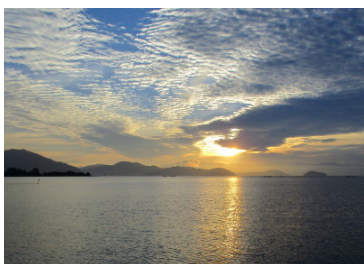
もとは航行する船舶用の灯火であったが、今では近代的な泊火と変身している（写真右）。添付写真では白い灯りにみえるが、航行する船舶から見える裏に回ってみると確かに赤い灯りであった。

夕食は今津駅近くの川魚料理店「西友本店」で川魚セット

を頼んだ。鰻重、鮎塩焼き、氷魚天ぷら、鯉こくなどで満腹となった。夜は保養所で爆睡。



6月26日（月）



竹生島は雲がたなびく朝焼けが美しい島だ。太古の昔から続く神秘的な自然の姿をそこに感じる事が出来る。午前4時半に今津港に着き旗艦で旨いコーヒーを頂き出港した。艇庫から船出したなぞり周航クルーは元気よく海津大崎に向かう。10分程度漕いでは5分休憩を繰り返しながら海津大崎の砂浜にボートを横付けし、乗員の交代を済ませる。次の目標は竹生島。静かな湖面を力漕する3艇の姿は神々しく、仏の世界を彷彿させる。（写真左上）瑠璃色の湖面にキラキラと輝く陽光は、まさに「瑠璃の花園」だ。

奈良時代に聖武天皇の勅命を受けて僧行基が弁財天を祀った時から祈りの島となった。近世には千手観音菩薩も祀られており、「仏の御手に抱かれて眠れ乙女子やすらげく」の歌詞は千手観音菩薩の御手のことと思われる。今日、クルーが漕ぐ船はそんな景色の中をひたすら島陰に向かっていく（写真上左）。竹生島宝巖寺三重塔などは「珊瑚の宮」の朱色だ。初雁号は竹生島でクルーと別れ、一路柳ヶ崎港へ舳先を向けた。（写真右上）一目散に南へ走り、6月26日午後12時45分柳ヶ崎ヨットハーバーに無事帰港。



6月27日（火）京大クルーもゴール

自宅近くの瀬田川沿いを車で通りかかったところ、対岸から大歓声が聞こえる。瀬田川の京大艇庫に27日午後4時半無事



に帰着の瞬間であった。おめでとう！（写真右上）スマホでその瞬間を撮ることが出来た。ここでも最後の琵琶湖周航の歌の大合唱が水面を越えて聞こえてくる。

6月30日びわ湖音楽祭（びわ湖ホール）

加藤登紀子プロデュース第一回びわ湖音楽祭がびわ湖大ホールで開催された。加藤登紀子は東大ボート部 OG の経歴を持つ。祖父は守山市出身で、両親はともに京都生まれであるが新婚初夜を過ごしたのが旧琵琶湖ホテルで、滋賀にも縁がある。父親と、後に夫となる藤本敏夫氏の愛唱歌が琵琶湖周航の歌であったと述懐している。音楽祭の最後に出演者と観客 1800 人によるびわ湖周航の歌の大合唱は感動そのもの。（写真右） 山際京大総長も駆けつけ、「琵琶湖周航の歌は京大ボート部の歌と思っていたが、滋賀県の歌となり、日本人の歌となり、英語に翻訳されて世界の歌になろうとしている。この歌に謳われているように、水の上で過ごすような、ゆったりとした穏やかな人生を送りたいものです」と締めくくられた。全く同感。



追記

① 西国十番長命寺

琵琶湖周航の歌 6 番で「西国十番長命寺」となっているが、正しくは西国 31 番札所である。この件は小口太郎も知っていたらしく、ボート部員から「西国 31 番だ」と指摘を受けた時に「それじゃ入らないじゃないか」と答えたという。あくまで七五調に拘って作詞したと思われるエピソードが残っている。

（びわ湖音楽祭誌飯田忠義氏記事による）

② 歌詞は仏教的で曲はキリスト教的

小口太郎が作詞した詞は「仏の御手に抱かれて」で代表されるように浄土思想や仏教的感性に基づいている。一方で吉田千秋はキリスト教に傾倒し讃美歌を作曲していた。

詞が仏教的、曲が讃美歌的という世にも珍しい融合が伸びやかな周航歌にぴったりと合っている。（同上記事による）

走行データ

日程	行程	直線距離	所要時間
6月25日	柳ヶ崎→今津港	55.0Km	5.0時間 ほぼ全速運転（機走）
6月26日	今津港→海津大崎	7.5km	約1.5時間 ボートに伴走
	海津尾崎→竹生島	7.5km	約1.5時間 ボートに伴走
	竹生島→柳ヶ崎港	52.0km	5.0時間 ほぼ全速運転（機走）

（香川記 2017.07.12 改）

番外編

1. 「雄松が里」は滋賀県大津市近江舞子にある雄松崎のこと。歌の舞台となった雄松館（滋賀県大津市南小松 1095）の現在の主に電話で聞いてみると、赤い椿の森陰で泣いていたのは雄松館の女中さんの3人いた娘さんの一人の事であろう。ただ、小口太郎の「乙女子」は彼の故郷、長野県岡谷市に住んでいた河西すず子さんであった。親には結婚したいとの気持ちを打ち明けていたが、「未だ早い」と諫められ、兵役のことも悲観して自殺したという。雄松館の主の話では赤い椿は実際にあったが、1本のみで森ではなかった。詩人の想像力が森とした。また、原木は枯れて、現在はその実から育てた新木が命を繋いでいる。中々大きくなると嘆いておられた。

加えて、椿の季節は初春で、葉書に書かれた6月とは時期的に合致しない・・・、とも。

2. 資料館の方に聞いてみると、竹生島の描写で「瑠璃の花園、珊瑚の宮」とあるが、琵琶湖の水の色が瑠璃色で陽に輝いている状態が「花園」ではないか。竹生島の赤い手すりや三重塔などがイメージとして珊瑚の宮と表現されたのではないかとの説明であった。

実際に朝焼け陽に輝く湖面は瑠璃の花園もかくやと思わせる風景であった。